

十勝港

広尾町港湾課

〒089-2605 北海道広尾郡広尾町会所前6丁目2番地

☎01558-2-0185 (ダイヤルイン)

URL : <http://www.town.hiroo.hokkaido.jp/>



1. 概況

広尾町は十勝の南端にあって、北緯42度15分、東経143度18分に位置し、北海道の背骨といわれる日高山脈の東側の地帯を占めていて、東西31km、南北29km余におよび、その形はほぼ三角形をなし596.16km²の面積をもつ人口6,669人の町である。

港の歴史としては、明治20年に、初代北海道長官、今村通俊氏が、英国から港湾技師マーク氏を招へいして、7月から9月にかけて十勝ほか道東各港の干満測量や地質調査が行われ、次いで明治23年に、道庁広井勇技師がその後を引き継ぎ、本港修築のため詳細なる調査を行い、大正3年から同10年に至る7年間に、地形、深浅、潮流観測等が実施されている。このような経緯を得て、大正13年7月、衆議院において、広尾漁港修築建議案が提出され、採択された。

昭和4年第2期北海道拓殖事業計画で新規に取り上げられ事業費1,299,400円をもって南防波堤2,050尺、北防波堤900尺、船溜突堤東550尺、同北450尺、船溜面積4,050坪、埋築5,310面坪を築設し、昭和4年9月に修築工事が起工され、同9年に至る6カ月で完成するものと計画されたものであった。その後、昭和18年に至る15年間の継続事業として総工費175万円をもって、第1期工事を完了し、その後、大東亜戦争の影響により工事は中断された。

戦後、昭和26年に本港の修築工事が再開され、同年4月に避難港の指定を受け、南北防波堤と船溜東、北堤とも高上工事が施工されてから、港内の静穏度が著しく改善された。また昭和28年3月広尾町長が港湾管理者となり、当時避難港であった十勝港も十勝管内唯一の海の玄関港として、苫小牧港と釧路港との中間に位置し、道東における流通拠点港湾として開発され、港湾区域もそれまで半径1,000mを1,300mに広げ昭和34年6月政令第214号により地方港湾に昇格、翌35年はじめて貨物船が入港接岸し、このころより商港的役割を見せるに至った。昭和37年に日本海運(株)が地元十勝海運(株)と併行して活発な海運業務を開始し、港湾取扱貨物量は前年の8万9,000トンに対して15万1,000トンと飛躍的に増大した。更に翌38年関光汽船(株)が出張所を開設し、海運業務が一段と活発化され、十勝地方開発のための港としての役割を果たすことになった。

このころより本港は単なる広尾町に属する商港というより、全十勝の流通の要となってきた現実をふまえ、その名を「十

勝港」に変更の機運が高まり、昭和38年6月町議会において議決され、昭和40年5月港則法第80号により正式に広尾港が十勝港に改称され、昭和41年には取扱貨物量も30万トンの大台にのり、単なる港としてでなく、地域開発に占める責任もまた重要視されるに至った。これを裏づけるように運輸省港湾局の昭和60年を目標とした港湾整備の方向づけのなかで十勝港は全国38港道内7港が指定された流通拠点港のひとつに取り上げられたのである。

翌44年には名古屋港との定期航路の開設、またセメント配分基地の設置により、セメント専用船の入港を見るなどこのような港勢の発展を背景として名実ともに十勝平野及び北見、上川地方の一部をヒンターランドとする流通拠点港としての役割が認識されるようになり、昭和45年5月1日付政令第116号をもって道内8番目、町としては唯一の重要港湾の指定をうけるに至ったわけである。

重要港湾の指定を受け、その使命を発揮する港として整備が進められ、現況の施設は、大型けい留施設-13m 1バース、-12m 1バース、-10m 1バース、-8m 1バース、-7.5m 6バース、-5.5m 8バース、総延長2,390mを有している。取扱貨物については農水産品、林産品、鉱産品、化学工業品、特殊品など平成30年に145万トンとなっている。平成11年4月には、植物防疫法に基づく指定港、同年7月には、関税法に基づく「開港」となり、平成12年6月には、検疫法に基づく無線検疫港の指定を受けた。

日本有数の食糧基地「十勝」を背後圏に持つ十勝港は、地域の基幹産業である農業を支える港「アグリポート」と位置づけ、十勝で生産された農産品を全国に向け移出する一方で農業生産に不可欠な肥料や飼料原料の安定供給に向け、輸移入も行っている。平成23年4月からは、保管から配合飼料製造までを一貫して行う飼料コンビナートが操業開始し、取扱貨物量も堅調に推移している。

平成26年11月からは、水面貯木場が供用開始となり、港湾機能の強化と利活用の促進など多機能な港湾整備を進めている。